

外科症例レポート

患者年齢：00歳 性別：男性

疾患名：右足底悪性黒色腫右腓脛部リンパ節転移

手術手技名：右腓脛リンパ節郭清術

手術施行日：20・年・月・日

術者：〇〇〇〇、△△△△、□□□□

コメント

<術前診断、術前合併症>

現病歴：20・年・月頃足底の腫瘤を自覚し、・月18日◇◇病院を受診。悪性黒色腫(深度約2.5 mm)と診断された。腓脛リンパ節部エコー・MRIでリンパ節転移は認められなかった。(pT3b、N0、M0 Stage II B)

当院での化学療法を希望され、20・年・月8日に当院皮膚科を紹介受診。PET-CTでも異常集積が無いことを確認し、皮膚科にて、DAV フェロン療法を3クール施行。その後、皮膚科外来にて月1回のフェロン局注療法を施行していたが、右腓脛靱帯下方に弾性軟のリンパ節を触知し、・月7日のPET-CTで右腓脛リンパ節にFDGの集積を認めた。

フェロンによる反応性のリンパ節腫脹、悪性黒色腫の転移の可能性が疑われ、右腓脛リンパ節生検目的に・月22日皮膚科へ入院。生検の結果、摘出したリンパ節5個中1個で転移陽性であったため(病気はStage III)、右腓脛リンパ節郭清目的に20・年・月11日当科へ入院された。

<既往歴>

- #1. 高血圧症 : 内服加療中
- #2. 脳梗塞の既往 : バイアスピリン内服中
- #3. 認知症
- #4. アルコール依存症の既往
- #5. 手術歴あり : ・歳 虫垂炎手術
・歳 半月板損傷手術
・歳 頸椎ヘルニア手術
- #6. アレルギー : なし

<術前検査>

血液検査：20・年・月11日の血液検査では感染症なし。
肝機能、腎機能問題なし。凝固系問題なし。
術前(20・年・月12日)の血液検査ではWBCが $10,900/\mu\text{l}$ とやや高値。
心電図：脈拍：80/min、洞調律、整(20・年・月28日)
肺機能検査：指示通りできず、肺活量2.49 L、%肺活量76.4%、1秒率79.84%

<術前の治療方針>

全身麻酔下に右腓脛リンパ節郭清を行う。

<実際の手術手技の内容>

20・年・月12日全身麻酔下に右腓脛リンパ節郭清術を施行した。
皮膚切開のデザインは添付の写真のようにとった。郭清範囲はQuadrilateral blockの範囲とし、前回皮膚科で行われたセンチネルリンパ節の癒痕をとるように幅2cm程度術後の皮膚壊死が起こることを見越して切除するようにした。
デザインに沿って切開後、内外側に浅筋膜を皮弁側に含めるようにして皮弁拳上。皮弁拳上後、大腿筋膜も含めて筋層上で脂肪組織(浅腓脛リンパ節含めて)を拳上した。上方からは腓

径靱帯の高さから下方へ脂肪組織の拳上剥離を行った。大腿三角部では深単径リンパ節郭清はわけて行うこととし、まずは大腿動静脈の血管鞘は切開しなかった。また、下方の内外側縁は脂肪組織の拳上の際、2-0 絹糸にて結紮切離するようにした。また下方内側で大伏在静脈を確認し、結紮切離した。

浅単径リンパ節郭清終了後、深単径リンパ節の郭清に移った。大腿動静脈の血管鞘を切開し、周囲の線維性脂肪組織を伏在裂孔部まで剥離した。大伏在静脈分岐部を確認し大伏在静脈を結紮切離し、線維性脂肪組織を摘出した。血管の剥離中に大腿静脈の壁を損傷したため 7-0 プロリンにて縫合止血している。S-B バックドレーンを留置し、縫工筋弁を大腿動静脈上を被覆するように単径靱帯上の線維組織に縫着後、3-0 ナイロンで真皮を、5-0 ナイロンで表皮を縫合し、終刀とした。

<術後管理、術後経過>

術後管理：術後、皮下に液体貯留があり、適宜排液を吸引した。

術後 7 日目(20・年・月 19 日)夜間、SB ドレーン 2 本中 1 本を自己抜去。翌日 SB ドレーンを抜去し、ペンローズドレーンを挿入した。術後 12 日目(20・年・月 24 日)にはペンローズドレーンを抜去し、術後 14 日目(20・年・月 26 日)に抜糸した。

術後経過：病理組織診の結果、浅単径リンパ節、深単径リンパ節ともに 5 個中 1 個の転移が認められた。(total 10 個中 2 個で転移陽性)

術後経過は良好で、創部の感染も認めなかった。・月 26 日に抜糸を行い、・月 29 日退院とした。

研修医名：高知大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター ○○○○

指導医名：高知大学医学部附属病院 ・・外科 △△△△

<レポート作成にあたっての注意点>

1. フォントは明朝体の11ポイントを用い、英・数字は全て半角とし、インデントなどを用いて見やすく整える。
2. 年号（和暦または西暦）、句読点（ 、 。 または , . ）を統一する。
3. 薬品名は一般名を用い、なるべくカタカナで記載する（商品名を記載する必要がある場合、初出時に注釈を記載）。一般化されていない場合は原語を用いて良い。
4. 薬品名と用量、検査項目と数値、数値と単位などの間は半角スペースを入れる。
5. 細菌などの学名はイタリック体、2 命名法によって属名の 1 字目は大文字にし、2 回目以降属名を 1 文字に省略する。
6. 参考文献の記載方法
 - 1) 単行本の場合 著者名あるいは編者名／書名／出版社／出版年／ページ数
 - 2) 論文の場合 著者名／タイトル／本・雑誌名／出版年／巻数・号数／ページ数
 - 3) Web ページの場合 作成者／タイトル／URL／アクセスした日付